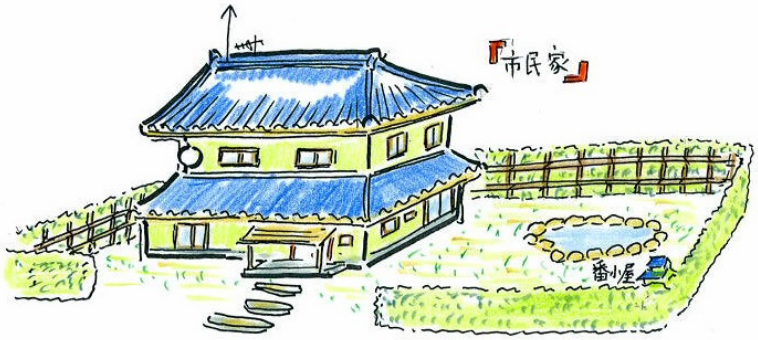
支援くんの火災予防奮闘記

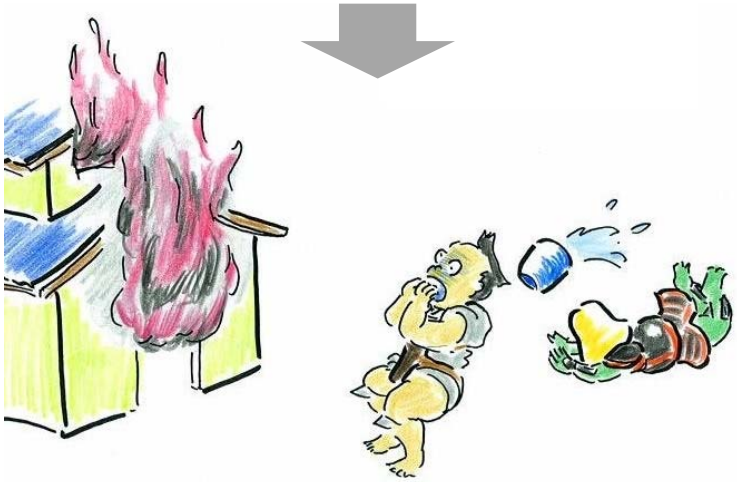
これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。

物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の中間（ちゅうげん） ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年５歳になる市民家の長女 援(えん)ちゃん には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

点得(てんとく)幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦労の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.44

前号のあらすじ

6月に祭日があったら…というご助に、支援くんから親孝行をするなら、と特別手当と休暇が与えられる。しかし臨時収入を得たご助は、孝行どころか部屋に閉じこもってネット競馬に耽り、興奮のあまり支給品の携帯ライトを床に打ち付け、その衝撃で出火させてしまう。見れば、そのライトはナイト（製品評価技術基盤機構）からリコール案内があり、以前交換するようご助に命じておいたライトだった。問いただすべくご助を捉えようとする支援を振り払い、お屋敷へ逃げ込んだご助。支援は飼い猫ならぬ飼いハムスターの「チュータ」と共にご助を追いかけ、お屋敷の中、主様の書斎へと向かうのだった。

「おお、かたじけない。」　拙者は携帯ライトを受け取ると、これから向かう先をチュータの背から照らしたのじゃった。

「こっちじゃな？」チュータはライトの照らし出す方向へと歩を進めた。

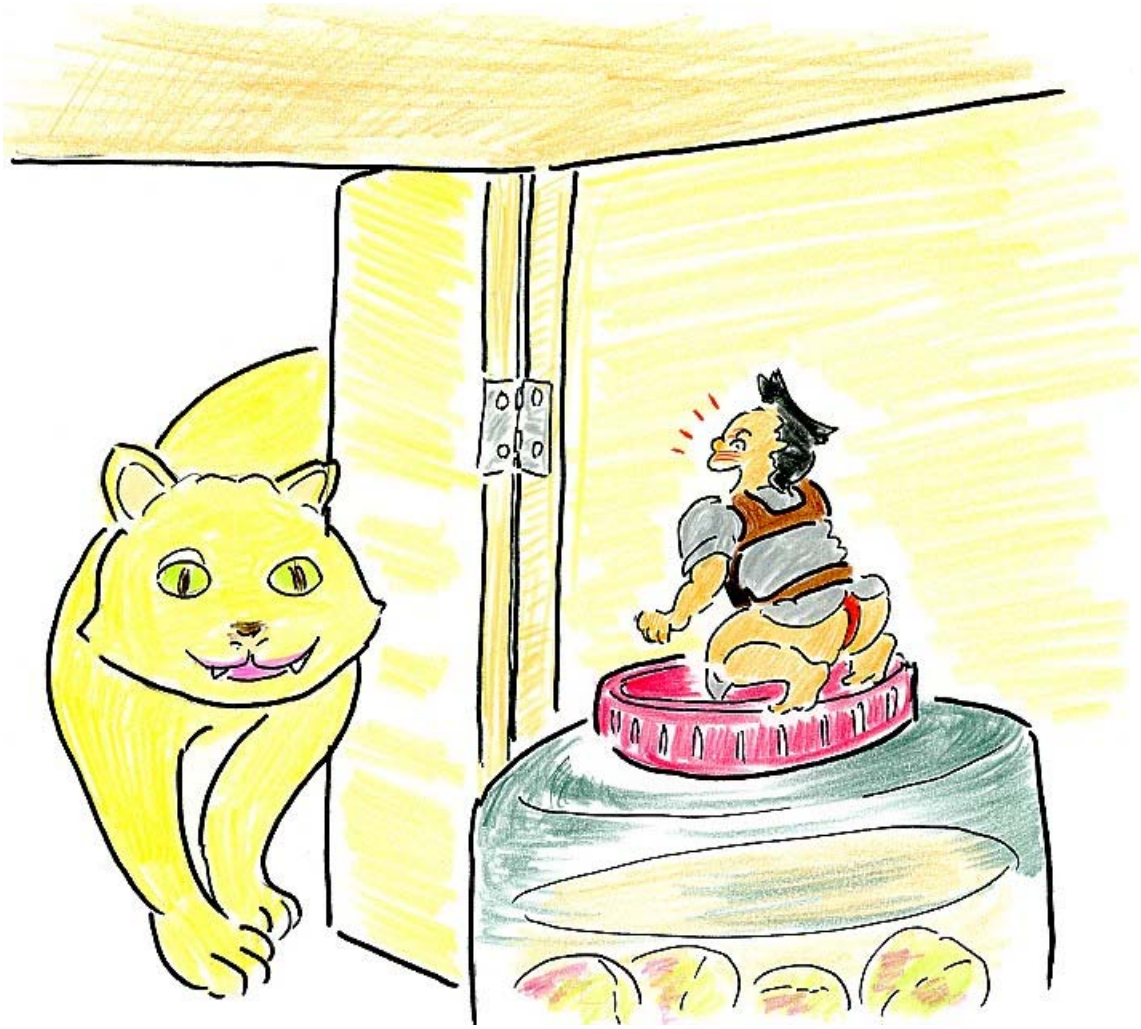
その頃ご助は、キッチンのシンクの下に潜り込むと、奥方様が先日漬け込んだばかりの梅酒の瓶の蓋と格闘しておった。

「うぬぬぬぬぅ・・・こ、これはまた固く閉めて・・・開かねえじゃねえか。馬鹿女（奥方様）め、全く開けるモンの身にもなってみろってんだ。」と毒づきながらも

「し、しかし・・・この梅は良い匂いだねぇ、確か兼六園事務所の知り合いからの頂き物と奥方様が主様にお話しされていたな・・・。今年の梅はいい出来だって・・・ううううッ」

と諦めきれず蓋と格闘するご助のところへ

「ニャにやってるのにゃ？」とミーがやって来て・・・



「その瓶はまだ１か月しか経ってにゃい。３か月経たないと飲めにゃいんだにゃ。梅酒が飲みたいのにゃら、主様の書斎に２年物の梅酒があるじゃにゃいか。」と続けたのじゃった。

「主様の書斎？　そうじゃ確かに棚の上に梅酒を入れた瓶があったな。ミー殿、かたじけない。ついでにひとっ走り、あっしを書斎まで連れて行って呉れないかい？」とご助が頼むと

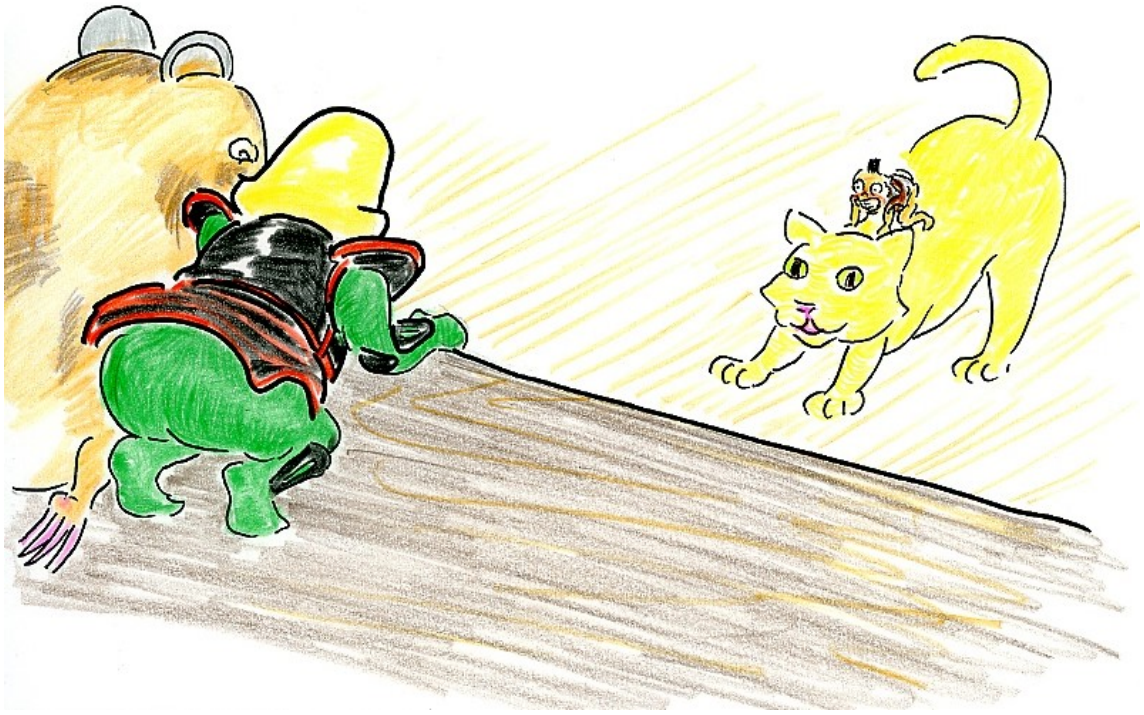
「良いが・・・見返りは？」と、ミーは短い指で Money の記号を作るのじゃった。

「ちッ、ガッチリしてやがるぜ、」と、ご助が最後の１分銀を渡すと、ミー殿は「毎度アリー、にょれ（乗れ）」と　ご助に背を向け、ご助がしがみつくとあっという間に二階へと駆けあがったのじゃった。

そのころ書斎では・・・

「ご助の奴は居らんの、キッチンじゃな。」と拙者がチュータと顔を見合わせて話しているところへ　タタタタ･･･と廊下をこちらへと走りくる足音が･･･。

「しっ、チュータ、誰か来る！」と拙者は小声でチュータを制すると、ライトの明かりを消したのじゃ。



直後、暗闇の中を緑色に輝く眼が二つ。 スススと書斎の中へと入って来た。

「ミー？・・・いやミーとご助じゃ。」　サッと、緑色に輝く目が先ほどまで拙者達が居た棚に飛び移る様を見て、拙者はそう確信し、棚板の陰に身を隠したのじゃった。

しばらくすると梅酒の瓶あたりが　パッ　と明るくなり、瓶の蓋に取りつくご助の姿がはっきりと見えるようになったところで、拙者とチュータは二手に分かれ、ご助の視界を避けながら近づいていったのじゃ。

ご助が瓶の蓋を開け放つと、辺りにツンと梅酒のふくよかな香りが漂い、「た、たまんねぇ。」とご助はマイ柄杓を瓶に突っ込むと、汲みだした梅酒をグイッ と一息に飲み干したのじゃった。

「プハーッ、旨い！」と叫んだご助の歓喜の声は、拙者が打ち下ろした携帯ライトによって途中から「ウギャーァアア」という悲鳴に変わった。

「ひいいぃぃッ・・・な、何しやんでぇ！誰でぇ！　あっ、だ、旦那様？どうして此処に？

じゃねぇやい！旦那様とて勘弁しやせんぜ！」とご助は頭をさすりながら言うと、傍らに置いた携帯ライトを手に拙者に向かって来たのじゃった。

暗闇の中、ライトから放たれた光の棒が２本・・・思わず拙者が

「コオォオオー、コオォオオ・・・」という呼吸音を発すると

「？？？・・・だ、旦那様、な、何の真似ですかい？」と不審そうに聞いてくるご助に

「コ、コオォオオ・・・これか？ライトセーバーの積もりじゃ。」と拙者が答えると

「？？あっダースベーダー様ですかい！では、あっしはルーク・スカイウォーカー・・・」

と語るご助を

「いいやヨーダ、ソチの容貌はどお見てもヨーダじゃ。」と遮ると、ご助は

「ちッ、いい気になりおって、旦那様とて容赦できやせんぜ！目にもの見せてやらぁ！」と叫ぶと

『ビーン、ビビーン・・・ビーン』との掛け声と共に、拙者に打ち込んできたのじゃ。

　期せずして、主様の書斎で映画のワンシーンが繰り広げられ、バシッ、ガシッと、鍔迫り合いを繰り返すうちに拙者達のライトからはモクモクと煙が・・・。

しかし拙者達は、

「このおッ」「くそがッ」　と、罵声を浴びせあいながら戦いを止めなかったのじゃ。

その様子を一段上の棚から眺めていたミーじゃったが、

パッ　と飛び降りると

「おまえらは馬鹿にゃ？リチウム電池はにゃ、衝撃を与えると発熱し、火災を起こすこともある！しらにゃいのにゃ？」と叫びながら拙者達の横面に強烈なネコパンチを！

「ウギャー・・・」「ヒイィッ」との悲鳴を残し、拙者達は気を失ったのじゃった。

どれほどの時間が過ぎたのか、意識を取り戻した拙者が

「そ、そうじゃ、ライトは？衝撃で煙がでておったが。ど、どこじゃ？火事になるぞ！」とライトを探す拙者の傍らには、未だ気を失ったままのご助の姿が・・・。

「こ、このボケナスが！おのれに取り替えを頼んだ拙者が馬鹿じゃったわ！」とご助を揺り起こそうとした拙者に

「起きてますよ。」とご助が小声で・・・。

「な、何じゃ、起きておるなら何でライトを探さんのじゃ？」と問いただす拙者に

「あれですよ。」と横になったご助が指さす方を見ると、ミーとチュータが･･･。

よく見るとミーがしきりに後ろ足で何かを蹴りあげ、傍らではチュータが

「ミーさん、本当にこれで良いのかい？」と聞いているところじゃった。

「あ、馬鹿が起きたようね？」と申したのじゃった。

「ば、馬鹿ぁ？言うに事欠いて馬鹿とは何だ！」と怒る拙者に

「だ、旦那様、本当のことでさ・・・あっしらが気絶してる間にミーが、いやミー殿が火事になるのを防いで下さってたんですぜ！」とご助が拙者を押さえ込んだのじゃった。

「な、何ぉッ？ミーが火事を防いだだと？どういうことじゃ？」と鼻白む拙者にご助は

「だ、旦那様、旦那様はリチウム電池から火が出た時の消し方を知っておりますんで?」

と聞いてきたのじゃった。

「リチウム電池から火が出たら？そ、それはやはり水を掛けてじゃな・・・」と言うと

「はあぁぁ・・・やっぱりねぇ。」と馬鹿にしたようなご助の嘆息に

「お、おのれ、な、なにがやっぱりじゃ！？」と拙者の怒りはマックスに！

じゃが

「旦那様。リチウム電池の火災に水は厳禁、爆発的に燃え広がると教本に、忘れたんですかい？」とのご助の言葉で

「な、何ぃ？水が駄目？で、ではどうやって消すんじゃ？」と拙者が混乱しておると

「あれでさ。」とご助がミーの足元を指さしたのじゃった。

そこにはミーが運んできた新品の猫砂の袋が・・・。

「ね、猫砂？あっ、そうじゃ！！」と叫ぶ拙者の前にチュータが仁王立ちになると

「支援！防火の妖精失格だな。リチウム電池の火災に水は厳禁。最適な消火方法は乾燥砂であろうが！」と今さっきミーから教えてもらったであろう「ウンチク」を並べおったのじゃった。

「うぬぬぬぬぅ・・・そうであった・・・乾燥砂じゃ・・・。そ、それでミーが猫砂を・・・」とその場で崩れ落ちる拙者に、ご助めが

「まあまあ、あっしでさえ気づかなかったんだ。そんなに気を落とさなくても大丈夫ですぜ。それとミーと呼び捨てはいけやせんや。ミー殿、良いですかミー殿とチュータ殿ですぜ。」と　勝ち誇ったように申すに至り

「き、貴さま、もとはと言えばおのれがサッサとリコールライトを交換せなんだからではないか！おかげで、ミーやチュータの前で大恥をかかされたわッ！」とご助に掴み掛かると

「て、てやんでぇ、その元は旦那様がケッタイなお休みを呉れるからじゃねえか！それと火事を防いで下さったミー殿とチュータ殿を呼び捨てにしちゃいけやせんぜ！」とご助が掴み返して来て、とうとう取っ組み合いに・・・。

そんな拙者達の様子を、半ば呆れかえりながら見ていたミーとチュータじゃったが

「ほっといて大丈夫なのかい？」と心配そうなチュータに

「大丈夫よ。いつものことなんだから。馬鹿は放っておいて帰りましょ。でも心配だったらこれを」とミーは猫砂を渡した。

「おッ？、こいつは喧嘩をおさめるのにも役立つのかい。」と猫砂を受け取り拙者達に向き直ったチュータの背中へ向け

「役立つなんてもんじゃないわ、即効よ。」とミーが言うと、それを聞いたチュータが

「そおーれ」と拙者達に勢いよく猫砂をぶちまけたのじゃった・・・。

途端に拙者達を強烈な臭いが襲って来て

「？？　く、臭ッ、何じゃこの匂いはッ、ご助大丈夫か」と叫ぶ拙者は

「だ、旦那様！臭いッ、苦しい、助けて！」と悲鳴をあげるご助と、猫砂の中で二人で抱き合ったのじゃった。

「ほら、直ぐに仲直り・・・効くでしょ使用済みの猫砂は。でもね、言っとくけどリチウム電池の火災に使用済みはだめよ！」とミーは言うとチュータを伴い書斎から出ていったのじゃった。

強烈な猫砂に埋もれ、遠のく意識の中で拙者は思ったのじゃ。

「わし・・・らは・・・リチウム電池・・・以下かい・・・」と。

（おしまい）